

三 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(30点)

かかる程に、冬になりぬれば、いとつれづれに世の中のうらめしきことのみ思へば苦しきを、⁽¹⁾行ひは許されず、「心慰めに、東の方へまからむ」と、親に申しければ、「なほ、この正月の司召に過ぐせ。それにともかくもあらずは、⁽²⁾唐土へもいませよ」とのたまふに、さはりて待ちけるに、その司召にむなしうなりぬれば、思ひ憂んじはてて、⁽³⁾さ言はでえあるまじき人のもとに言ひやる。

⁽⁴⁾浮き草の身は根を絶えてながれなむ涙の川のゆきのまにまに

とあるを見て、⁽⁵⁾さりともふとはえ行き離れじと思ひて、返し、

遅れりて嘆かむよりは涙川われおり立たむまづながるべく

かくて、まことにこの男ものへいなむと思ひたる気色を見て、親、明け暮れ呼びすゑて、「人の世のはかなきを知る知る、はるかにいなむと言ふは、親をいとふか。なほ、この正月の司召をだに待て」と、せちにのたまふ。思ひわづらひてながらふるに、その司召にもかからずなりにけるに、深く世の中憂きことと思ひ憂んじはてて、⁽⁶⁾帝の御母后のおもと人、この知れる人のなかに言ひやる。

なりはてむ身をまつ山のほととぎすいまはかぎりと鳴き隠れなむ

とありけるを、おもと人らあはれがりて、「かくなむ申したる」と啓しければ、父はたその後の甥にて、「罪咎もなきに、⁽⁷⁾かくてさぶらはせたまへば、人の国にも隠れ、山林にも入りぬべし」と、せちに奏したまへば、「宮仕へせず、空めきたりとして、懲らさむとて、とたるぞ。いまは懲りぬらむ」とて、その司召の直物に、もとの官よりはいまま少し勝りたるをぞたまひける。

(『平中物語』による)

注 かかる程……主人公平中（平貞文）が天皇に官職を取り上げられ朝廷に出仕していない頃。

司召……中央官を任命する儀式。古くは正月に行われた。帝……宇多天皇。おもと人……貴人に仕える召使い。

この知れる人のなかに……この男の知っている人のところに。父……平中の父、平好風。

とたる……「とりたる」の促音便化「とったる」の促音無表記形。直物……官位任命の追加訂正をすること。

〔問一〕 傍線(1)(3)(7)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(1) 「行ひ」

- A 朝廷の仕事に励むこと
- B 故郷を捨て唐土まで行くこと
- C 一旗揚げに東国まで行くこと
- D 出家し仏道修行をすること

(3) 「さ言はでえあるまじき人」

- A 辛く悲しい思いを訴えずにはいられない人
- B 世の中や親への怒りを打ち明けずにはいられない人
- C 辛く悲しい思いを訴えてはいけない人
- D 世の中や親への怒りを打ち明けてはいけない人

(7) 「かくてさぶらはせたまへば」

- A 役職を与えないままにさせておかれたので
- B 役職を与えないで出仕させていらつしやつたので
- C 怠惰な生活を正すため親の監視のもとに置かせていらつしやつたので
- D 怠惰な生活を監視するため天皇の母に仕えさせようとなさつたので

〔問二〕 傍線(2)「ともかくもあらず」と同じ内容を表現している部分を、本文中から二カ所探し出し、それぞれ十字以内で抜き出さない。

〔問三〕 傍線(4)「浮き草の」の和歌の説明として適当でないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 「浮き草」は官職のないはかない身の上の比喻である。
- B 「身」には「実」が掛けられ、実が結ばないことを暗示している。
- C 「ながれ」には、「流れ」と「泣かれ」が掛けられている。
- D 「涙の川」は流れる涙を誇張して川に喩えた表現である。
- E 「ながれ」「涙」「川」は縁語である。

〔問四〕 傍線(5)「さりともふとはえ行き離れじ」とあるが、女はなぜそう思ったのか。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 二人の関係は浅く、平中は口ばかりで実行力の無い色好みだと、まったく信用していなかったから。
- B 平中の親が、天皇やその母に訴えてでも親元から離れることを阻止するだろうと確信していたから。
- C 二人の結びつきは深く、平中は親の言うことには逆らえない優しい性格の男だとわかっていたので。
- D 平中の知り合いの召使いからの直訴で、天皇の母が決して離京を許さないと予測していたから。
- E 二人の結びつきは深く、平中は絶望的な和歌を詠みながら、実は次の司召に強く期待していると知っていたから。

〔問五〕 傍線(6)「ものへいなむと思ひたる気色」について、文法的な説明として適当でないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A ナ行変格活用の動詞が一度用いられている。
- B 四段活用の動詞が一度用いられている。
- C 係助詞が一度用いられている。
- D 意志の意味の助動詞が一度用いられている。
- E 存続の意味の助動詞が一度用いられている。

〔問六〕 次の文ア～オのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 「遅れるて」の歌には、一人後に残されるより自分が先に死んでしまいたいという、強い情愛がこめられている。
- イ 「親をいとふか」という表現には、もうどうにでもなれという、老いた親の諦めの心情がこめられている。
- ウ 「なりはてむ」の歌が詠まれたのは、この歌が詠まれた年の司召から三、四カ月経過した後である。
- エ 平中が官職に就けなかったのは、裏で天皇の深慮がはたらいていたからであった。
- オ 時の天皇の母は、平中の父のおばである。